

# マゾメス男子の作り方



## 目次

第一章『マゾメス男子の探し方』	2
第二章『マゾメス男子の捕まえ方』	7
第三章『マゾメス男子の誕生』	20
第四章『洗脳』	26
第五章『マゾメス男子のいる生活』	37

「ああっ！ダメっ、イクっイっちゃいますう！」

「おい、誰がイっていいなんて言った？」

「ごめんなさい！でも、だめなんですご主人様あ！」

ベッドで交わる男女、しかし普通のカップルの性行為と明らかに違うのは、女性は全裸に犬のような首輪をつけ、さらに股間には男性を表すシンボルが生えていることだった。しかもそれは子供のように小さく、ご主人様と呼ばれる男の物は女の肛門に差し込まれている。

女はふやけきった顔に涎だけではなく鼻水や涙も流しながら全身を痙攣させ昇天している・・・これがこの空間での日常、普通の愛の行為だった。

男として生を受けた私は、今は女・・・いや雌奴隷としてご主人様にお仕えしている。私の名前は愛花（マナカ）、元の・・・男の時の名前は捨てたし興味もない。

今の私は愛花、被虐と隷属の快楽に支配された女だから。

これは私が普通の男から雌奴隷へと堕ちていくまでの話。

## 第一章『マゾメス男子の探し方』

まずは奴隷にするためのマゾメス男子を探しましょう。

マゾメス男子を探す場所はSNSが最も効率よく、なおかつ顔や体もわかるので会った時のミスマッチが怒る可能性も下げることができます。

特に女装アカウントでアダルトな内容を投稿している娘がおすすです。

俺は都内の大学に通う地味な大学生。

サークルに所属して仲間とキラキラした学生生活とは程遠い生活を送っている。

授業が終わればすぐに帰宅する。そんな生活を送っていた。

でもそんな俺には人には言えない趣味があった。

それは女装だった。そしてその写真をSNSにアップして♡をもらうことで小児欲求を満たす生活を送っていた。

もちろん女装で外出する度胸なんてないから、大学に進学して一人暮らしになったのをい

いことに、自分の住んでいるアパートの中だけで女装を楽しんでいた。

一度夜にゴミ捨てを女装でしてみたことがあるけど、そのときは心臓が爆発するんじゃないかってくらいにドキドキして、もう二度としなくていいと思った。

SNSを見てると、女装でお出かけどころか飲食店や居酒屋に行っている投稿を目にするけど、自分にはとてもできないと思うし、羨ましいような嫉妬するような複雑な気持ちになってしまう。

始めたばかりのときは♡が一つでも付けば喜んでいたのが、最近は♡だけではなく、どれだけの人に見られているか、何人フォロワーが増えたか、そればかりが気になってしまうようになった。

「あれ・・・この人って・・・」

俺は自分がフォロワーしている女装さんの投稿を見てみると、♡をつけてる人の中に見覚えのあるアカウントを発見した。

それは以前よく♡やコメントをくれた人で、最近全然見かけなくなった人だった。

それが他の人、しかもエロ写真や動画中心に投稿している人のところに行くなんて・・・もちろんこれは勝手な嫉妬だし、SNSで誰を推すかなんて個人の自由だってことはわかってる・・・でも俺は悔しい思いを抑えられなかった。

そして俺はついにエロを解禁することにした。

最初は少し脱ぐだけ、もちろんアカウントが消えないようにモザイク処理をして、少し脱いだけなのに俺は投稿の送信ボタンを押すまでかなりの時間がかかってしまった。

「えっ！？これって・・・」

投稿してからしばらくしてSNSを開くと、そこには今までに見たこともないような数のコメントが付いていた。

「すごい・・・」

俺は今までに感じたことがない満足感を感じ、エロ画像を投稿するという背徳感が消え去ってしまった。

それから俺はどんどんエロ画像の投稿をしていった。

最初は少し脱ぐだけだったのが、徐々に性器をもろに露出させて、薄いモザイクを書ける程度になり、動画も撮るようになっていった。

初めて自分の肛門に物を挿入もした。

初めは痛くて、動けなくなってしまうたのも、動画にして投稿したら過去一番の好評を得ることができた。

ネット通販のリストを公開してフォロワーからプレゼントを貰えるようになり、お尻専用のおもちやも手に入れた。

正直気持ちいいとは全然思えなかったし、お尻に何かが入っていると、便意のようななんとも言えない苦しさがあるし、振動させたり、ピストン運動をさせると尿意のような感覚が出てきて不快でしかなかった。

でもフォロワーはそんな俺が我慢してる表情が良いとコメント欄は大盛り上がりだった。プレゼントは物だけではなく、暗号資産のアドレスを公開して現金として収入を得ることもできた。

そこからさらに動画投稿サイトでファンクラブみたいなものを作ってサブスク収入を得るようになって、俺の口座にはお金がどんどん貯まっていた。

もちろん大学を辞めて就職をしないという選択肢が取れるような収入ではなかったけど、お小遣いには十分な収入を得ることができた。

そしてそのお金で様々な道具を買って、さらに動画や写真作品を作っていた。

「んゝゝゝなんかそろそろ新しいことしないのかなゝゝゝ」  
しばらくすると俺のフォローの増加も成長が鈍化した。

もちろん今までとは比べ物にならないくらい♡やコメントが来ているのは事実だった。  
でも一時期の増え方からすると最近の増え方は鈍いように感じてしまう。

なにかまたバズれるネタはないかそればかりを考えていた。

フォローとオフパコしてみるとかゝゝゝいやいや、それは少し怖い。

単純なエロだけでは限界があるのかなと考えているところに一通のDMが届いた。



